論　文
ライフデザイン学研究 10
p.19-49（2014）

ベテラン精神科ソーシャルワーカーの クライエントとの『かかわり』形成プロセス

The Process for Establishing “kakawari” Between Expert Psychiatric Social Workers and Clients

國　重　智　宏
KUNISHIGE Tomohiro

要旨

日本のPSWは、クライエントとの関係や自らのソーシャルワーク実践を「かかわり」という言葉で表現してきた。本研究では、PSWの実践の中核を示し続けてきた「かかわり」の形成プロセスを明らかにすることを目的に、一定の経験を有する10名のベテランPSWを対象にインタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。

その結果、＜想いを馳せる＞＜体験を共有する＞＜想いを共有する＞の３つのカテゴリーから成る「かかわり」の形成プロセスが明らかとなった。ベテランPSWは、自らの情緒を、行為を媒介にしてクライエントに伝える。その行為に対するクライエントの反応が、ベテランPSWの情緒を揺さぶる。そして、再びベテランPSWが、行為を通して自らの情緒をクライエントに伝えることにより＜想いを共有する＞関係に深まっていく。このようにベテランPSWの「かかわり」は、循環的因果関係により形成されることが明らかになった。

キーワード：かかわり　ワーカー－クライエント関係　循環的因果関係

Ⅰ．はじめに

2004年に厚生労働省より精神保健医療福祉の改革ビジョンが出され、「入院医療中心から地域生活中心へ」という方向性を示すとともに「受け入れ条件が整えば退院可能な入院患者」約７万人を今後10年間で解消するとの数値目標も示された。しかし、精神科病院の約８割を民間病院が占め、経営を維持するために入院患者を必要とする構造的な問題もあり、改革ビジョンから10年経った現在においても、社会的入院の問題は解消されていない。精神病床数は、OECD諸国で最も多く、10万人当たり269床であり、加盟国の平均の４倍であった（OECD 2014：1)。

門屋（2010）は、政策の貧しさによって不幸な生活や人生を送らざるを得ない精神障害者や家族に対する大きな人権侵害について「かかわりをもった私たちワーカーには、彼らの人生を取り戻す生活支援を全力で行う責任があることを訴えたいのです。」と指摘している。しかし、大谷の量的研究では、経験年数が３年以下の精神科ソーシャルワーカー（以下、PSW）は、「関係性」においてエンパワメント志向の要素が優位に低く、また、医療機関に所属するPSWもエンパワメント志向も低いと指摘している（大谷2012：186-7)。この結果からも精神障害者の人生を取り戻す生活支援を全力で行う力量を有していないPSWが一定数存在することが示唆される。

日本のPSWたちは、クライエントとの関係や自らのソーシャルワーク実践を「かかわり」という言葉で表現してきた。特に1973年のY問題（PSWが関与したクライエントに対する人権侵害問題）以降、PSWは、実践の中核を示す言葉として「かかわり」を用いてきた。

1997年に精神保健福祉士が国家資格化されて以降、法的にあるいは診療報酬上に、配置職種として精神保健福祉士が規定されることで、医療機関や障害福祉サービス事業所などにおいてPSWの配置が進んできた。その一方で、制度や機関から求められる業務や役割をこなすことで、「自分はソーシャルワーカーとしてやっていると思っている。それがクライエントにとってどういうことなのかということが反省されないまま、『ああ、これが私の仕事なんだ』と思って何ら違和感を覚えない」PSWが増えていると指摘されている（柏木2014：162)。

PSWが、単なる保健医療福祉サービスの「提供者」や「仲介者」ではなく、「終始、クライエント側に立つ」（柏木2014：163）存在として機能するためには、自らの「かかわり」を省察することが必要である。PSWの実践の中核を示し続けてきた「かかわり」という言葉のもつ意味を明らかにすることで、これからの時代におけるPSWが果たすべき役割や存在する意義について一定の方向性を示すことができると考えられる。

Ⅱ　先行研究と研究目的

１．先行研究の概観

これまで現場のPSWによって著された「かかわり」というキーワードを用いた文献は数多くあるものの、「かかわり」を主要なテーマとした文献は多いとは言えない。

柏木は、「かかわり」を「『ワーカー－クライエント関係』が示唆するよりももっと人の営みの深みにおいて織り成す人間模様の一部終始に触れることによって、ようやく論じえるかもしれないという

厄介な代物である。」（柏木2007：2）と表現している。やどかりの里において先駆的実践を展開した谷中は、「『問題に対処』するための『専門的能力』をあらわすことだけではなく、常に日常生活的なかかわりや、共同体の一員としてのかかわりが要求されてくることから生じてくる。問題解決で終了するものでもない。とすると、従来のワーカー・クライエント関係では説明しきれない部分がある。」（谷中1983：31）と指摘している。このように柏木や谷中は、援助という目的があり、その目的達成のための人間関係である「ワーカー－クライエント関係」では、説明しきれない関係として「かかわり」を理解している。

柏木は、Y問題を契機に「かかわりということに急速に目覚めることとなった」（柏木2010：46）と回顧している。柏木は、Y問題以前の自身のクライエントとの関係性を、以下のように自己批判している。「私の側では関係の対等性を強調したけれども、事実は未だ話もしない、会いもしないうちから患者だと断定しないまでも、取り扱わるべき対象者だときめてかかった。だから対象者として規定された相手方からすれば、その経験は決して対等などではありえなかったのである。したがって私の中のワーカー・クライエント関係の理念は空転したといわざるをえない。」（柏木1975：６－７）。

これ以降、柏木は、クライエントとの関係性について繰り返し論じるようになる。1995年には「かかわりの専門性（思案）」の中で、PSWは、本音や人間性を出さないかかわりに止まってはいられないとして、「ごく対等のあたり前の友人関係」の必要性を指摘した。そして、「自分の素性を明かすこと、これを一切しない、つまり自分の本心を打ち明けない、本音を出さない、人間性がにじみ出ないような関わりでいいのかというそういう反省があります。自分の家の住所等をひたすら隠すこと果たしてこれが専門職業としての特徴であるといえるのか、時代は、またわたしたちの経験は、またわたしたちの技術・技法はこういうところにとどまっていることは許されないと思うのです。」と主張した（柏木1995：87）。

2002年には、「かかわり」を「クライエントとソーシャルワーカーが互いに切り結ぶ交流から共に歩みを進めること」（柏木2002：43）と規定した上で、PSWの「かかわり」の基本的性格として、自分とは異なる背景をもつクライエントの存在を尊重し、彼らに直に触れ、感じていく姿勢が必要であると主張した（柏木2002：43-4）。

また、2010年には、PSWは、「好意的で善意に満ちたソーシャルワーカー主導制」であり、「心理的な父性主義（パターナリズム）のアプローチ」であった「ワーカー－クライエント関係」から協働というかたちの「かかわり」に転換し、地域のトポス（人が生き、集まる場）で自己開示しながら、クライエントの地域生活を支えていくことの必要性を指摘した（柏木2010）。

柏木は、PSWの「かかわり」を、クライエントとの「職業的関係」（柏木2007：2）であり、「専門的関係」（柏木2010：105）であると認めた上で、その関係性において、PSWは、クライエントからできるだけ距離をおいて、客観的に理解していくのではなく、クライエントと共にいて、彼らと共に見ていく（柏木2010）。そうした「かかわり」は、地域のトポスで行われるため、援助の終結と共に「スパッと切るということができない」関係性であると指摘している（柏木2010：69）。

一方、谷中は、やどかりの里での実践を基盤として「かかわり」に関する考察を深めていた。1974年には、「人と状況は相互に影響している。人は状況を変えたり、状況によって変えられたりする。状況抜きにして人は考えられない。私たちをとりまく状況をもっとよいものにと考える時、お互いに

力をあわせたり、注意しあったりする。そこにかかわりが生じるのである」(谷中1974：19-21）と述べ、援助する者－される者という関係を超え、パートナーとして共に歩む必要性を主張した。

また、1979年にも「かかわり」を「人と人との出会いとそこに繰り広げられる関係」と規定し、その上で「障害を持っていても、自分たちと同じ１人の人間として、主張しうる人であり、そこに責任と義務を遂行しうる人であるという姿勢で臨み、かつそのように努力する両者の姿勢が必要である」と指摘した（谷中1979：810)。

1983年には、「関係」を「ワーカー・クライエントの間において、ある共通の関心事をとおしての結びつきを意味し、相互作用そのものである」と規定し、その関係が深まった状態から「かかわり」という言葉を使用した（谷中1983：25)。

1987年には、「かかわり」のプロセスを、以下のように詳細に提示している。「相手方の欲求、要求をどう受けとめ、どのように対応していくかが、まず第一に求められることである。そして、かかわる側がそれなりの対応を繰り出すことの中で、相手方がその対応にどのような反応や判断をもって応じてくれることが第二に求められることである。さらには相手方の反応を確認する作業と、共通の課題性を導き出す作業が求められるのである。これら相手方とかかわる人との間に強い信頼関係が生みだされるのである。相手方との間に一つの関係を軸に、多くの人々との出会いやさまざまな出来事が展開され、それらの経験を自らの成長へのバネとして、徐々ではあるが自己の内的世界がふくらんでいくのである。自己の内的世界のふくらみによって、さらにまわりの人々の意見や経験を自己の世界の中にとり込むことが生じ、さらに、その変化は相手方との関係にも影響を与え、両者の関係そのものへの変化となってくるのである。相手とかかわる側の間柄が相談者と来談者、援助者と被援助者から活動を共にする人、よりよきパートナーとしての間柄へと移行する。時には活動を共ににない、仲間としての間柄や相手から援助されたり、援助したりすることもある。援助者と被援助者といった一定の関係を意味するだけでなく、いろいろな状況のもとで、相手方との関係性や役割には変化が生じてくるのである。活動を通じて、これらの変化を相手方との間で意識しつつ、活動の中での自らの役割、位置づけ、相手方との距離といったことを常に測定しておくことが重要なことになってくる」(谷中1987：72-3)。

1993年には、『かかわり』という論考集で、自らの「かかわり」を振り返り、「包丁と砥石との関係」から、「支えたり、支えられたり」といった関係が増えてきたと指摘した。その上で「支えられる」には、相手を信じて身を託すことが必要であり、加えて「いつでも困った時には一身に我が身に責任をひきうけるといった覚悟」も必要であると指摘した（谷中1993：236)。

また、藤井によると、谷中は、やどかりの里におけるセミナーもしくはワークショップにおいて以下のように「かかわり方」の説明を行った（藤井2004：167)。

① 何が問題なのかを聴くこと（外側からはわからない悩み）ワーカーの第一課題
② 問題解決への共同作業（何か効果に表れないと信用にならない）即出来ること。
③ ふりかえりの作業（同じ経験をしてもズレが一杯ある）ズレの認識の確認。(違うと認識することが第一。第二になぜかと考える。ズレをどう縮めるかの目標設定が第三)
④ 課題設定と目標樹立（課題の確認と作業手順の戦略会議をメンバーと行う)、課題を遂行する。
⑤ ふたたびふりかえりの作業（互いに評価して、次の課題へ）互いにほめあう（大きく深呼吸して

味わう。次へ急がない。活動にはリズムがあるので、力を入れたり、抜いたりして、呼吸を合わせる)。

⑥　循環（かかわりのくりかえし)。

⑦　かかわりの変化（ダイナミックな変化がある)。

このように谷中は、「包丁と砥石との関係」や「支えたり、支えられたり」といった関係性を形成するPSWの「かかわり方」に着目し、その「かかわり方」によってクライエントとの関係性が変化していくことを示した。

坪上は、「かかわり」と「援助関係」を同義と考えており、「援助関係論」を「かかわりの三つの性質」として説明している（坪上1988：193-5)。坪上は、ゲシュタルト（人間の環境世界の知覚方法）という考え方を援用して、「かかわりの性質」を、「一方的関係（援助者の判断によって一方的に働きかける関係)」、「相互的関係（援助者と被援助者が共通の関心事について折り合いを求める関係)」、「循環的関係（被援助者の関心・都合を通して、援助者の関心・都合を見直す関係)」の３種類に分類し、数の上では少ないものの「循環的関係」が被援助者の回復に最も確実な支えと成り得る関係であると指摘している（坪上1998)。坪上の援助関係論は「援助関係を中心に、その参加者それぞれに起こる変化も含め、総合的ダイナミズムを捉えた理論」(大谷2012：99）ではあるが、「かかわり」を構成する要素に関する説明は十分ではない。

また、坪上の援助関係論を実証的に明らかにした大谷の「ワーカー－クライエント関係」に関する研究では、「関係性」の構成要素として「パートナーシップ」「職業的援助関係」「柔軟性」「信頼関係」「対等」の５つの因子を抽出した（大谷2012)。大谷は、先行研究を通して、「関係性」を「ワーカーとクライエントとの間の相互作用の状態や質、すなわちワーカーとクライエント間でやりとりされる情緒と力のあり様に焦点を絞った概念」(大谷2012：99）と定義を行った上で、調査を実施した。そのため、調査結果で明らかにされた「関係性」の構成要素は、「かかわり」のもつ要素を含みつつも、柏木や谷中が指摘している「かかわり」がもつ固有性については調査対象ではないこともあり、十分に説明されていない。また、精神科ソーシャルワーク実践における「かかわり」は、PSWとクライエント間でやりとりされる情緒と力のあり方のみならず、谷中が指摘している「かかわり方」という方法を通して展開されると考えられる。大谷の研究では、PSWの「かかわり」における「かかわり方」に関しては、調査対象から除外されているため、明らかにされていない。

高木は、「かかわり」の構成要素として「Involvement（関与的立場)」「Commitment（積極的関与)」「Engagement（相互自律的関与)」の３つの様態があり、最終的にEngagementの様態への変化する過程そのものを包含する概念として「かかわり」という言葉が用いられていると指摘した（高木2013)。高木の研究は、実践場面におけるPSWの立ち位置に着目した研究であり、PSWが現場で経験している「かかわり」形成のプロセスについては十分に触れられていない。

PSWは、「かかわり」という言葉を用いて日々の実践を積み重ねてきているが、「かかわり」は異なる要素やレベルを包含している多様で、多層で、多義的な言葉のため、明確な定義づけをできないまま、使用し続けている。また、先行研究においても「ワーカー－クライエント関係」とは異なる関係である「かかわり」がもつ構成要素やPSWが経験している「かかわり」のプロセスについては十分に整理されているとはいえない状況にある。そこで、これらの課題を明らかにするために質的調査

を実施した。

2．研究目的

上記のように「かかわり」については、これまでも多様な解説がされており、それぞれが「かかわり」の一面を描写している。しかし、「ワーカー－クライエント関係」とは異なる「かかわり」がどのように形成されるかという経験のプロセスについては、必ずしも明らかにされていないと考えられる。現場で経験されている「かかわり」には、PSWとクライエント間における「情緒と力のあり様」に加え、谷中が指摘している「かかわり方」を媒介にして展開されていると考えられる。

そこで、本研究では、「かかわり」を「援助関係が、人と人としての関係へと発展する過程」と暫定的に定義した上で、PSWが経験しているクライエントとの「かかわり」形成のプロセスを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　研究の視点および方法

1．研究方法の選択とその理由

本研究で明らかにしようとしているPSWの「かかわり」は、異なる要素やレベルを包含している言葉である。そのため、「今立ち止まってよく考えてみれば、これほど実践感覚を指し示しつつ頻繁に用いられながらも、そのことばの本質についての理解が十分であったかと自問すれば、それに対してのこたえを持たないことに気づいた」(高木2013：41）という状況の中で、PSW毎に多様な意味で用いている。加えて、「かかわり」とは、PSWとクライエントの主観同士による複雑な相互作用がプロセスとして進行していく。

このような「かかわり」についてPSWが語るデータは、視点の多様性を含む「ディテールの豊富」で「詳細」なデータ（木下2003：64）であると考える。そうしたデータのもつ複雑さやリアリティ感を活かして分析を行わなければ、「かかわり」の実態を明らかにすることはできない。

Flickは、「フィールドで出会う人々のものの見方や行為は実にさまざまである。その背後にやはり多様な主観的立場と社会的背景とがあるからである。質的研究はこのような視点の多様性を考慮にいれるのである。」と述べている（Flick＝2002：10)。そのため異なる要素やレベルを包含しているPSWの「かかわり」について明らかにするには質的研究が適していると考える。

本研究では、実践知を再編成するのに有効な修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用した。M-GTAは、研究対象がヒューマンサービス領域であり、社会的相互作用を持ち、かつプロセス的性格を備えている研究に適している（木下2003：89-90)。本研究の研究対象である精神科ソーシャルワークにおけるクライエントとソーシャルワーカーとの「かかわり」は、お互いが相手を通して自分の見方を見直していく循環的関係であるとされている（坪上1988：194)。加えて、この関係は、社会的相互作用（人間と人間が直接やり取りすること）を有しており、かつ螺旋的循環関係（坪上1988：194）というプロセス的性格を備えている。M-GTAは、既述のように研究対象がヒューマンサービス領域であり、社会的相互作用を持ち、かつプロセス的性格を備えている研究に適しており、本研究の手法として適していると考える。

また、本研究では、これまで実践知として伝えられてきた精神科領域におけるクライエントとソーシャルワーカーとの関係を、M-GTAという独自の視点から再編成していく。M-GTAによる研究結果は、「普遍性を志向し広く一般化できる性質のものではなく、分析に用いたデータに関する限りという限定つきのもの」（木下2003：26）であるが、限定された研究テーマの範囲においては、人間の行動の説明と予測に関して十分に説明可能である。

加えて、本研究では、研究結果が現場のPSWの指標として、実践場面で活用されることを目的の一つとしている。そのため、研究結果を実践で活用するという役割（応用者）を、その構造の中に内在しているM-GTAが研究方法として適していると考える。

２．研究対象

本研究では、大学（学部）で社会福祉学を修め（うち２名は修士号も取得）、精神保健福祉領域で働く経験13年以上のPSW10名（男性５名、女性５名）にインタビュー調査を行った。精神保健福祉士取得の有無は問わなかったが、10名全員が精神保健福祉士であった。13年という年数は、岩田が「自分の持ち味を生かしたソーシャルワーカーになる」と指摘している経験年数である（岩田1999:55）。また日本精神保健福祉士協会実施の研修で、参加要件の経験年数が最も長い認定スーパーバイザー研修も13年となっているため、参考とした。年齢は37～52歳で、平均42.4歳（男性43.4歳、女性41.4歳）。経験年数は14～29年で、平均19.6年（男性20年、女性19.2年）。所属は、精神科病院３名、障害福祉サービス事業所７名（現在、施設勤務者のうち４名が精神科病院勤務経験あり）であった。

３．実施方法

調査期間は、2006年11月～2007年８月である。インタビュー時間は、１人につき、48分～１時間43分で、平均１時間15分。インタビューガイドを作成し、それに基づき半構造化面接を行った。インタビューは調査協力者の許可を得て、録音し、逐語録を作成した。

インタビューでは、「クライエントと『かかわり』を形成することができたと思われたケースとできなかったと思われるケースについて、各々一人のクライエント（統合失調症を有する方）を思い浮かべて、そのクライエントへの援助の開始から終結までについて話してください。」「今回取り上げていただいたケースだけではなく、日頃、クライエントとの『かかわり』を形成する際に、気にしていること、大切にしていることについて話してください。」以上の質問を提示した上で、自由に語ってもらった。インタビューデータは許可を得て、録音し、逐語録を作成し、分析を行った。

今回のインタビューにおいて、クライエントの診断名を統合失調症に限定したのは、PSWの「かかわり」がクライエントの障害の特性により異なる部分があること、また、これまでのPSWの「かかわり」が、主に統合失調症を有するクライエントへの支援の蓄積を通して語られてきたためである。

４．分析手順

M-GTAでは、まず一人分のデータ全体にざっと目を通す。その上で、分析テーマである「ベテラ

ン精神科ソーシャルワーカーの統合失調症を有するクライエントとの『かかわり』形成プロセス」に照らして、ディテールが豊富で多様な具体例がありそうな１人分のデータから、以下の手順で分析を始めた（木下2003：158-172、233-8）。

① 分析テーマと分析焦点者（調査協力者を抽象化した集団）に照らして、データの関連箇所に着目し、それを一つの具体例（ヴァリエーション）とし、かつ、他の類似具体例をも説明できると考えられる、説明概念を生成する。
② 概念をつくる際に、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例などを記入する。
③ データ分析を進める中で、新たに概念を生成し、分析ワークシートは個々の概念ごとに作成する。
④ 同時並行で、他の具体例をデータから探し、ワークシートのヴァリエーション欄に追加記入していく。具体例が豊富にでてこなければ、その概念は有効でないと判断する。
⑤ 生成した概念の完成度は類似例の確認だけでなく、対極例についての比較の観点からデータをみていくことにより、解釈が恣意的に偏る危険を防ぐ。その結果をワークシートの理論的メモ欄に記入していく。
⑥ 次に、生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討し、関係図にしていく。
⑦ 複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要を簡潔に文章化し（ストーリーライン）、さらに結果図を作成する。

本研究で最初に着目したのは、次の記述、「まあちっちゃいことでいえば、笑わなかったので、最初の頃は。ずっーと、しかめっ面と、そのしかめっ面が面接の中で笑ったとかね。うーん。いう時はちょっと関係が作れたかなと思うし、喋る量が増えたとか、自分からポツポツしか喋らなかったのが、こう自分からワアーっと喋るようになってくるとか。あーと、結構、自分の内面の部分とか、あんまりこう、あの誰にでも話すような内容でないものを、こう話題が出てきたりした時は、これは関係が取れているなと、こちらは確認しますよね」という箇所であった。

下線部分に着目した理由は、調査協力者であるPSWがクライエントと関係ができたと感じたのが、クライエントの援助目標が達成された時ではなく、クライエントが「誰にでも話すような内容でないもの」をこぼした時であったという点である。調査協力者は、他機関から紹介されて、施設を利用するようになったクライエントと、施設内だけの専門的援助関係に留まらず、一緒に飲みに行くなどの素のつきあいもしながら、クライエントが本音を話せる関係を形成していった。この語りに、柏木(2007）が指摘する「幅と深みのあるコミュニケーションであり、人格の交流」であるという「かかわり」の一端が示されていると考えた。

クライエントが、PSWに対して本音の想いを伝えるようになることに着目し、この調査協力者のデータの他の部分や、他の調査協力者のデータから類似例の検討を行った。そうすると、「周りが許さないから退院できないけど退院したい」「本当は作業所ではなく以前の仕事をしたい」「働きたいけど働けないということを親に理解してもらいたい」などのクライエントが本音の想いを語っていると解釈できるデータがみられた。これらの例には、経験の共有などを通じて築いた信頼関係を基に、ク

ライエントからPSWに本音が伝えられるという共通点がみられた。このことから一定のヴァリエーションが確認できたので【PSWの想いを感じとったクライエントが、本音の想いを伝えてくれる】と定義し、概念名を“本音が返ってくる”とした。

また類似例の比較と並行して、対極例のチェックも行い、「表面上はフレンドリーに話してくれるが、何か隠している気がする」「借金があって困っているのに話してくれなかった」「そんなこと言えませんよ、職員なんだからみたいなこともあった」などの例がデータにみられることを確認した。この作業を繰り返しながら、概念の精緻化を行った。

表：分析ワークシート例

概念名	本音が返ってくる
定義	PSWの想いを感じとったクライエントが、本音の想いを伝えてくれる
ヴァリエーション	・まあちっちゃいことで言えば、笑わなかったので、最初の頃は。ずっとしかめっ面と、そのしかめっ面が面接の中で笑ったとかね。そういう時はちょっと関係が作れたかなと思うし。喋る量が増えたとか、自分からポツポツしか喋らなかったのが、こう自分からワアーっと喋るようになってくるとか。あと、結構、自分の内面の部分とか、あんまり誰にでも話すような内容でないものを、こう話題が出てきたりした時には、これは関係が取れているなと、こちらは確認しますよね（●4）
理論的メモ	・（対極例）それが何にお金を使っているのか未だに分からないですけど。ご本人は食べ物って言うんだけど、食べ物だけにそれはなかなか。何買ったかというと、絶対それだけではその金額いかないだろうな？何か隠しているんだと思うんですけど。そこも、あんまり出てこないというかな。そこは関係性がうまく結べてないかないのか何なのか分からないですけどね。表面上は非常に、にこやかにフレンドリーに話しをしてくれるんです。いつもね。（●7） ・利用者の本音が分からないと、課題の共有化はできない？

そして、常に生成した他の概念との関係を考えながら、その関係を結果図に描いていった。クライエントから“本音が返ってくる”には、PSWが“本音をぶつける”ことが必要である。そして、“本音をぶつける”には、＜体験を共有する＞ことを通じて築いたPSWのクライエントに対する信頼が必要であることがデータから読み取れた。そこから“本音をぶつける”と“本音が返ってくる”からなる〔本音の関係〕というサブカテゴリーを生成した。また“本音が返ってくる”ようになると、クライエントとPSWの双方が想いを共有できるようになることもデータから読み取れたため、＜体験を共有する＞ことを通じて、〔本音の関係〕を築き、＜想いを共有する＞ようになるというカテゴリー間の関係についての検討も並行して行った。

このような作業を繰り返しながら、３つのカテゴリー、２つのサブカテゴリー、21の概念を生成し、結果図を作成した。

５．倫理的配慮

調査協力者に対して、インタビュー実施前に、データの扱いに関する文書を提示した上で、口頭にて調査協力に対する了解を得ている。また、分析作業終了後に、分析結果と分析方法をまとめたものを送付し、全ての調査協力者に確認・評価を依頼した。併せて必要により、削除・訂正がありうることを説明した上で、再度、本研究への同意を得ている。

Ⅲ　結果・考察

M-GTAでは、データとの確認を継続的に行いながら解釈を確定していくという分析を行うため、段階的ではなく、プロセスとして分析が進行していく。そのため、分析に考察の要素が自動的に含まれるので、結果と考察を分けて記述しようとすると内容に重複が生じてしまう。また、M-GTAの結果は、分析が的確に行われていればいるほど読み物のごとく読める内容となり、読み手に理解しやすくなる（木下2003：238-9)。以上の理由から、本研究では、結果と考察を一体化して論ずる。

1．結果図

M-GTAでは、結果は、概念やカテゴリーを用いた結果図とストーリーラインで示される。分析の結果、３つのカテゴリー、２つのサブカテゴリー、21の概念を生成し、ストーリーラインと結果図を用いて、説明した。本研究全体の結果図は図として掲載している。

図では、線で概念を、点線でサブカテゴリー、二重線でカテゴリーを示した。

2．ストーリーライン

「　」にデータ、【　】に定義、“　”に概念、〔　〕にサブカテゴリー、＜　＞にカテゴリーを示した。

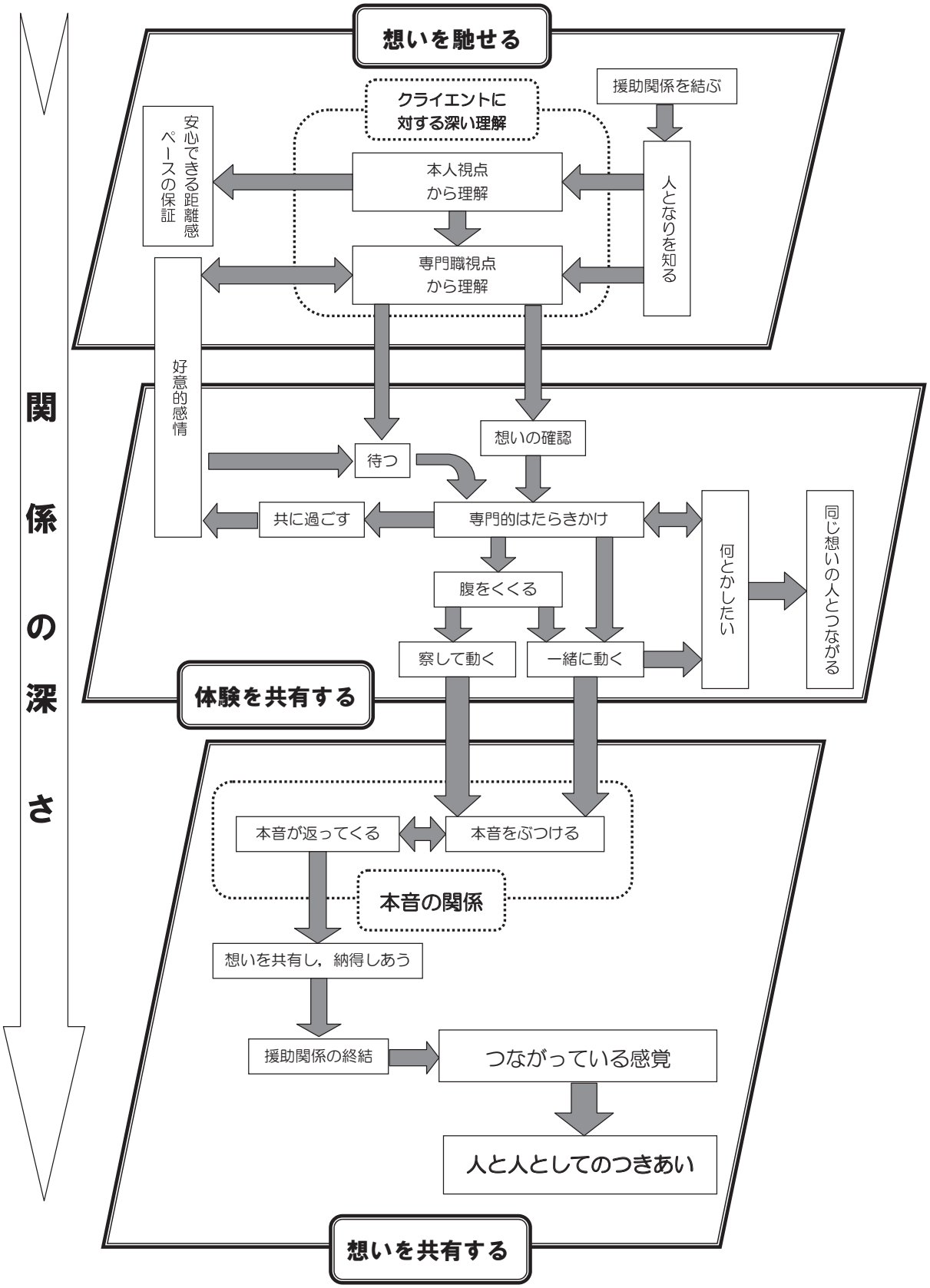
（ストーリーライン）

クライエントと“援助関係を結んだ”PSWは、〔クライエントに対する深い理解〕を通して、彼らの気持ちに＜想いを馳せる＞ようになる。＜想いを馳せる＞ことができるようになったPSWは、危機場面や日常場面での＜体験の共有＞を通して、彼らと〔本音の関係〕を築く。そうした関係になると、彼らとの“援助関係が終結”したとしても、お互いに“つながっている感覚”を持ち続けるようになる。このようにして築かれた＜想いを共有する＞関係は、クライエント - ワーカー関係を超え、“人と人としてのつきあい”として永く続いていく。

3．各カテゴリー・概念の説明

(1) ＜想いを馳せる＞カテゴリー

クライエントが機関の利用を始める、あるいは担当者変更等の理由により、PSWは、彼らと出会い、“援助関係を結ぶ”。面接や普段の会話等を通して、「実直」「穏やか」「礼儀正しくて、礼節を保っている」といった彼らの良い部分を知り、「たまの競馬と、晩酌程度」「テレビを見るのが好き」「お金を貯めるのが好き」といった彼らの興味・関心を知る。また、「結婚願望がすごく強かったり」「退院したいんだ」というその人の持っている強い想いや「閉じ込められた30年」「(家族が) 自殺されて」というような壮絶な「生きてきた歴史」も教えてもらう。こうして彼らの“人となりを知る”ようになったPSWは、「あの人はこうじゃないか、ああじゃないかという分析的な見方」ではなく、自分の見方を横において、“本人視点から理解”するようになる。“本人視点から理解”するようになったPSWは、人間関係に不安を抱える彼らに、「求められたら対応するくらいがいいのか、こっちからキュッキュツキュツと近づいていった方がいいのか、ジワジワやっていった方がいいのか」と相手の



図：結果図「ベテラン精神科ソーシャルワーカーのクライエントとの『かかわり』形成プロセス」

様子を見ながら“安心できる距離感・ペースの保証”をする。一方で、PSWは、クライエントと彼らを取り巻く環境との交互作用、そして彼らの可能性について、“専門職視点から理解”することも求められる。“専門職視点から理解”する中で、「今日お話した人は魅力的な人なの」というように、彼らに対して“好意的感情”を抱くことができると、「人徳もあって、みんなからもマスコット的にね。みんなから信望も厚かったというか。誰にも好かれる人」「多分僕じゃなくてもどなたにも受け入れられた」というように、PSWは、彼らの良いところ探しをする。そうすると彼らの長所や興味を重視する“専門職視点から理解”へと変化していく。PSWは、“本人視点から理解”と“専門職視点から理解”を統合することで〔クライエントに対する深い理解〕をするようになる。このようにPSWは、クライエントの気持ちに＜想いを馳せる＞ことを通じて、彼らに対する理解を深化させていく。

① “援助関係を結ぶ”

PSWは、「その方は病院のデイケアに行っていまして、そこのワーカーから紹介を受けて」「作業所を退所して、就労することになったので、サポート先として支援センターを紹介しますということで」というように他機関からの紹介や「医師からの指示で」というように他職種からの依頼、または「私がその病棟の担当者になった」というように前任のPSWから引き継ぐ形で、彼らと出会う。彼らと出会ったPSWは、【一機関のPSWとしてクライエントと出会い、彼らとの間に、援助関係を結ぶ】のである。中には「うちは最初から、ここに入所時点で、どうなったら卒業しますかということを確認してから入ってもらうんですよ」というように、援助関係を結ぶ際に、援助目標を確認し、援助の終結を意識するように働きかけるPSWもいる。

② “人となりを知る”

PSWは、インテーク面接や日々のクライエントとの接触を通して、「その人の全体像をできるだけ知る」ことに努める。本人からにじみでる「実直」「穏やか」「礼儀正しくて、礼節を保っている」といった彼らの良い部分を知り、会話の中で「たまの競馬と、晩酌程度」「テレビを見るのが好き」「お金を貯めるのが好き」「学歴へのこだわり」といった彼らの興味・関心を知る。こうした情報は「かかわりを広げるきっかけ」となっていく。加えて「結婚願望がすごく強かったり」「退院したいんだ」という強い「その人の持っている想い」や「閉じ込められた30年」「(家族が) 自殺されて」というような壮絶な「その人の生い立ち」「生きてきた歴史」を知ることは、彼らの視点から理解する必要性を、PSWに痛切に感じさせるのである。

また「家の庭で火を焚いて、周りが騒ぎ出して入院をした」「家族とは疎遠でちょっと戻れる先もなくて」「絵を売りますみたいな看板を、ご本人がアパートのドアの前に立てて」というような本人以外の周囲からの情報を通して、PSWは、専門職視点からも、本人たちのことを理解しなければならないと併せて感じるのである。

このような理由から、PSWは【クライエントの興味や希望、これまで送ってきた生活などを知ることにより、その人を理解しようと努める】のである。

③ “本人視点から理解”

PSWは、クライエントの“人となりを知る”ことを通して、【クライエントの視点から、彼らの想いや考えを知り、その認知する世界を理解しようと努める】必要性を感じるようになる。

例えば、花嫁願望が強いクライエントには「お料理を習うとか、何々ができるようになるっていうか、要するに花嫁修業に当たるようなことには乗るんですよ」というように、本人の視点を意識することで「（花嫁修業という）路線で、支援を組みたてようとしたら、少しすっきりしたね」という本人の希望や関心を中心に据えた支援を進める。

また「本人の妄想では、近所に●●病院の往診用のバンが止まってた。私を迎えに来たみたいな。実際はいないんだけれども…もしかしたら誤解をしたのは精神科病院の介護保険系サービスがバンで迎えに来たりとかするじゃない。そういうのを、ちょっと誤解しちゃったのかなあ」というように、本人の視点を意識することにより、PSWは、彼らの抱える不安や苦しみをイメージしていく。

このようにPSWは「あの人はこうじゃないか、ああじゃないかという分析的な見方」ではなく、本人の視点を意識することを通して、彼らが「何を期待して、何を望んでいるのかを察知」していく。

もし、PSWが、本人の視点を意識できなければ、「私が、自分の貯金の１億何十何万円を狙って取ろうとしてるっていうような手紙が来た」という対極例のように、PSWが支援したい気持ちがクライエントには届かず、「相手の気持ちと違う所にね、自分の関心が行っちゃえば、一発で人間関係が崩れちゃう」という結果に終わってしまうこともある。

④ “専門的視点から理解”

“本人視点から理解”するだけで、クライエントの援助目標を達成し、課題を解決できるとは限らない。専門職であるPSWには、【PSWとしての視点から、クライエントと彼らをとりまく環境の交互作用や彼らのストレングスに着目し、彼らについての理解を深める】ことが求められる。

例えば「生育過程に於けるトラウマがあったり、そういったものの未処理な部分っていう問題の方が大きかったので、そこの部分を丁寧に、ずっと扱っている」「この人は、閉じ込められていたエネルギーが、こういうこう病状にもでるのかなって思うくらいすごい精神症状が悪くなると出る人」「家には絶対帰れないって条件があってね。周りの環境もちょっと特別なものがあって」というような、彼らが過ごしてきた人生や彼らを取り巻く環境を知ることにより、彼らと彼らをとりまく環境との交互作用による影響を理解する。このようにPSWは、人と状況の全体性という専門職視点からクライエントを理解していく。

また「この方はですね、自分の体験を人に話すとか、文字にしたりとかできる方だったので。家に閉じこもってから、（家族と）喧嘩して、１人暮らしをしようと思って、グループホームに入ろうと思った一連の経過を書いてもらったんです。手記みたいな感じで。その書いてもらったものが、とってもよくって発表してもらったんです」というように、PSWは、彼らの持つ力を、ストレングス視点から評価することにより、「作業所に通う、就職するってことでは、その人にあまり適性はなかったんですが。こういう活動ができるってことはね、この人のすごくいい所でもあるので。こちらとしては貴重なボランティアとして、やってもらえて助かったなあっていう感じですね」と彼らの可能性を引き出していく。

このようにPSWは、クライエントと彼らを取り巻く環境について、人と状況の全体性やストレングス視点から理解することにより、「相手の力量とか状況を見極めるっていうか、見定める」ことが可能になる。

そして「決して、その人がそうしたいとか言うことだけで判断するのではなくて、ほんとの意味でのニーズ」というように表明されたニーズではなく、リアルニーズを把握できるようになると〔クライエントに対する深い理解〕への扉が開くのである。

⑤ “安心できる距離感、ペースの保証”

統合失調症は、関係の病とも言われる精神疾患である。そのため、この疾患を抱える人の中には、人間関係に強い不安感や緊張感を抱く人も少なくない。“本人視点から理解”するようになったPSWは、クライエントが「話しやすい」と感じるような距離感を「押したり引いたりしながら」徐々に築いていく。その際、「繊細な」彼らが「自分の世界に侵入された」と思わないように、彼らとの心理的距離感に「配慮しながら」、彼らの負担にならない「ペース」を守る。「求められたら対応するくらいがいいのか、こっちからキュッキュツキュツと近づいていった方がいいのか、ジワジワやっていった方がいいのか」相手の様子を見ながら詰めていくのである。とにかく「急がない」。

この距離感がつかめないと、「ちょっと距離があったのかもしれないね。だから逆に言うと何もないし、ぶつからないみたいな感じがあったんだけど」というように表面的な関係に終始してしまう。その結果、本音を聴くことができず支援が行き詰まったり、「入り過ぎてしまったんじゃないかっていう感じはありますね。うん。病気の中に入っちゃったっていうか」というように、近づき過ぎて彼らに不安感を与えたりしてしまい、クライエントから関係を拒否されてしまう。だからこそ、PSWは【クライエントの安心できるPSWとの距離感や支援のペースを保証する】ことを、常に意識しなければならないのである。

⑥ “好意的感情”

【クライエントの言動や存在を好意的に捉える】ことができるようになると、PSWは“専門職視点から理解”する際、彼らの良いところ探しをするようになる。例えば「そういういい人なんですよ。さばさばしていて」「いいオヤジキャラだったよね」「今日お話した人は、魅力的な人なの」というように、彼らに対して“好意的感情”を抱くと、「作業所で人徳もあって、みんなからもマスコット的にね。何て言うかな、みんなから信望も厚かったというか。誰にも好かれる人」「多分、僕じゃなくてもどなたにも受け入れられた」「とてもやさしい人なので」というように、PSWは、彼らの良いところ探しをするようになる。

一方で「その方の人柄に対して自分が好感を持つ」ことができず、クライエントに対して「ちょっとやり難いなあ」「こういう人が苦手なんだ」と否定的感情を抱いてしまうと、彼らの気持ちに＜想いを馳せる＞ことが難しくなる。その結果、「周りを振り回しちゃう感じの方」「あと素直に表現しない」「相手の気持ちを全然受け取らない人」「全くそれがもう学習されない」と、彼らの良いところ探しができないままに、欠陥モデルに基づく“専門職視点から理解”してしまい、彼らに対して一面的な理解しかできなくなる。

(2) ＜体験を共有する＞カテゴリー

＜想いを馳せる＞だけでは、クライエントとの関係は深まらない。“専門職視点から理解”したPSWは、自分の理解が、彼らの想いと同一であるのか「とにかく聞いてみる。分かんなかったら聞いてみる。教えてくださいって聞く。」「まず話を聴く。それをしないで勝手に解釈したり、自己判断したりしないって言うのが、私の大事なスタンス。」とクライエントに直接聴くことを通して“想いの確認”をする。その上で、PSWとしてのリフレイミングや直面化、社会資源の活用などの“専門的はたらきかけ”を行う。時に、彼らから信用されず、はたらきかけが機能しない場合もある。そのような場合は、食事や外出等を通して、彼らと時や場を“共に過ごす”。「やっぱり遠くから眺めるではない、相手の体温や雰囲気がこうダイレクトで感じられる」距離感で、「だから私も返せるっていう」関係を築くことで、相手の姿が見えてくる。こうした時や場の共有を通じて、彼らに“好意的感情”を抱くようになると、PSWは、「私の方も、彼自身に力があると思っていたし、だから頑張ってみて欲しかった」と彼らの力を信じ、彼らが「旗下しをするまで」、傍らにいて“待つ”ことができるようになる。PSWが“待つ”ことにより、彼らもまた信用されていると実感でき、PSWの“専門的はたらきかけ”を受け入れるようになる。そのような関係になると、目標に向かって“一緒に動く”ことが可能になる。退院先探しなどで一緒に動くことにより、PSWは、目標達成のために「何でこんなに長く入院していなければいけないんだとか、退院できる方法ってないのかな」「こちらから（グループホームに）入れてもらうという立場なんで。『いや大丈夫です。私たちが責任取りますから』みたいな感じで」“何とかしたい”と強く思う。だが、個人の力では何ともならないこともある。そうした時、あきらめずに“同じ想いをもつ人とつながる”ことにより突破口が開けることがある。一方、“専門的はたらきかけ”を行う中で、病状の悪化等の危機場面に直面することもある。その時は、たとえ本人から嫌がられたとしても、「ほんとに症状がさせている苦しい場面の時は、嫌な思いをしてでも支援する。その場は嫌われたとしても、その時は支援する。」と“腹をくくる”ことが必要である。また、一人暮らしのクライエントが作業所に来ない等の状況では、PSWは、「危険なというか、こう注意するマーカーみたいなもの」を働かせてタイミングを見失わずに“察して動く”ことにより、自宅で倒れていた等の危機状況に介入することができる。また、そうした「修羅場を一緒に色々くぐり抜ける」経験を通して、「一つの困難を共に乗り越えたみたいなところで関係性が強くなるっていうこともある」。このように＜体験を共有する＞ことで、関係は深まっていく。

①“想いの確認”

“専門職視点から理解”し、評価したとしても、それがクライエントの想いと一致するとは限らない。そのため、PSWは、【支援目標の確認や支援過程の振り返りを、クライエントと共に行う】ことが必要なのである。

「目の前にいる当事者の方に率直に尋ねるってことかなという風に思っています。色々、あーでもない、こうでもないって考えて、それでこうなんじゃないかっていう風な予測だけ、予測を立てることは大事かも知んないけど、予測だけで動くんじゃなくて、ご本人さんと会って、その中で進めていくってことなのかなあ。とにかく聞いてみる。分かんなかったら聞いてみる。教えてくださいって。聞くってことかな」「まず話を聴く。それをしないで勝手に解釈したり、自己判断したりしないって

言うのが、私の大事なスタンスの一つかな」というように、PSWからの一方的アセスメントで終わることなく、クライエントとの対話を通じて、お互いの想いや評価を確認し、そのズレを埋めながら共有していくことが必要なのである。このように「ご本人と確認し合いながら、進めていくって言うのかな」というスタンスで、PSWが支援を進めていくことができると、「相手の目的やモチベーションが確認できると積み上げがスムーズに行く」ようになっていく。

しかし、「この人のニーズは何だろうとかって思って聞くんだけど、なかなか話が核心には行かないし、こう問題を共有するってとこまでなかなか行けなくって」というように、クライエントの“想いが確認”ができないと、「お互いに距離を感じて」しまい、関係が積み上がっていかない。また、「何度も対策とかいろいろ考えたりとか、色々しているんですけど、全くそれが学習されない」というように、クライエントの本音を聞くことができないと、いくら時間をとって話し合ったとしても、支援の積み上げはスムーズにいかないのである。

② “専門的はたらきかけ”

“想いの確認”ができたと感じたPSWは【専門職としての視点からアセスメントし、そのアセスメントに基づき、クライエントにはたらきかける】ようになる。

「ポジティブな切り返しというか、リフレイミングして、ポジティブ・コノテーション、返していくっていうのを意識、かなり（意識）してますね。自己評価の低い、どんどんどんどんしてあげて、それ（自己評価の低さ）と、どれだけ戦って下げないようにするかっていう、戦いでしたかね」「最近、そういうお店（本人が働きたいと希望する店）自体もあんまりないからさ、どんなにお客さんが入ってないから見てごらんって言って」というように、リフレイミングや直面化という技法を用いて、はたらきかけていく。

また「特別障害給付金ってできましたよね。あれが取れたんですよ。経済的なところでも、すごいホッとしたりして、焦りもなくなってきて」「無拠出の基礎年金が貰えるようになって、障害者加算もつくようになって、少しでも外泊費用が捻出しやすくなったりっていう風なことがあって」「手帳を申請することになったんですね。２級ですかね。そうすると加算がついたんですね。それはすごく嬉しかったみたいなんですね」というように、公的な社会資源を活用して、彼らの希望を叶えるために、“専門的はたらきかけ”を行っていく。

しかし、時には「どちらかというと、こっちが主導を握りながら、これをやって退院しましょう。これをやって退院しましょうという形で、こういう言い方は非常に嫌なんですけど、彼の希望を聞いたら退院になっちゃうでしょ。私たちの計画に自分が乗らないと退院できないということで計画に乗ってきた」というように、本人の希望と相容れないはたらきかけを行わざるを得ない場面もある。しかし、そうした場面でも、「それは違うでしょうって言いながら」というようなやりとりを、クライエントとしながら、PSWの責務として“専門的はたらきか”を行うのである。

③ “共に過ごす”

PSWは、援助技法や社会資源を活用して“専門的はたらきかけ”を行うと共に【デイケアや作業所などでのフォーマルな活動やプライベートなつきあいを通して、クライエントと時と場を共有する】

のである。

PSWは、クライエントと「ただ単に世間話をするだとかね、一緒にご飯を食べるだとかね、それって遊んでるんじゃないのって言われる」ようなつきあいや「週に１回とか２回とか飲み会があったりとか、誰かの家で飲んだりとか、飲み屋さんに行ったりとか、外にも遊びに出かけて、みんなで出かけていったり、休みの日とか出かけていったりとか、そういう中で、僕も一緒に休みの日に遊びに出かけるなんてこともあったし、そういうつきあいもしていました」というように「公私で分ければ私の部分まで含めて、ちょっとお手伝いさせてもらったり」するつきあいを行う。PSWがそのようなつきあいを大切にするのは「やっぱり遠くから眺めるではない、相手の体温や雰囲気がこうダイレクトで感じられる」距離感で、「だから私も返せるっていう」関係を築いていくためである。

また「別に、隣に座っていてもいいし、別に日常会話していてもいい」「一緒にいるだけでも支援ですって、いるってことだけが既に、こうかわわりの始まり」というように、PSWは、何か具体的な支援をすることだけでなく、共にいることにも重要な意味を見出している。それゆえ「うまく行ったケースっていうのは長く、僕はその方と一緒にいる場所にいて、その方をおつきあいできたってことですよね」と、PSWは感じるのである。

④ “好意的感情”

PSWは、クライエントと“共に過ごす”経験を通して、【クライエントの言動や存在を好意的に捉える】ようになる。

PSWは、作業所やデイケアなどで、「パソコン教室のプログラムに、それなりに一所懸命参加されて」「社適で働くようになっています。それが週に３日入っていたかな。そういう形でお仕事にがんばっていて」とクライエントの努力を目の当たりにして、彼らに対する“好意的感情”を強めていく。

また、PSWは、クライエントと日常場面を一緒に過ごす中で「作業所で人徳もあって、みんなからもマスコット的にね。みんなから信望も厚かったというか。決してリーダーシップを取る様な人ではなかったので、誰にも好かれる人」「とっても人柄は良くって真面目で、それは誰が話しても分かると思うんだけれども」と「その方の人柄に対して自分が好感を持つ」と感じるようになる。

⑤ “待つ”

クライエントに対して“好意的感情”を抱くようになったPSWは、【クライエントが自分で決めたことを尊重して、すぐに介入するのではなく、彼らの力を信用して、彼らが納得するまで、傍らにいて待つ】ことができるようになる。

例えば「（仕事を）少しがんばったんだけれども、結局うまくいかないで、辞めてしまったんですよね。それを何回か繰り返して、その間は、私は聴くだけっていう形で」というように、彼らが納得して自分で「旗下しをするまで」、傍らにいて「待ってる」のである。

「私たちスタッフって、デイケアでも何でもそうなんですけど、この人はこうだからこうした方がいいよね。ああした方がいいよねとかって。この人にはもっとこういうサービス受けた方がいいよねとか、もっと若いんだから働いた方がいいんじゃないのとかって色々スタッフ観っていうものが出ますよね」というように、ついつい支援者側の想いや考えをクライエントに押しつけてしまうことも少

なくない。そのことに自覚的なPSWは、支援者主導で進めるのではなく、「あんま提案しないっていうか。提案しないで。本人のどうしたいかっていうのを、なるべくというか、100％相手に合わせるように」意識化するのである。

PSWがクライエントを信頼して待つ姿勢を見せることにより、クライエントもまたPSWを信頼するようになる。あるPSWは、アパート立ち退きを迫られたクライエントへの支援の様子を次のように語っている。「そのアパート立ち退きっていう困ったことが起こった時に、こっちが最初から手を出すと意味ではなくてね、彼自身の力も少しね、こっちも。でも、話を聞きながらって部分、でも、もう時間がないってところでね。彼自身が最大限やってみたってことと、私の方でそれならってことで、彼もそこまでやったんだったら、ちょっと任せてもいいかって。あんまり最初から私が出してしまえば、それはまた違う結果になってしまったかもしれないしね。私の方も、彼自身に力があると思ってたし、だからがんばってみて欲しかった」。このように、PSWが“待つ”ことを通して、クライエントもPSWの支援を受け入れるようになるのである

しかし、PSWがクライエントを信頼できず“待つ”ことができないと、「つまり本人の本当にしたいことというか、目標となっていないんだと思います。こっちが、そこの目標設定の部分から何かがうまく噛んでいないんだろうと思うんだけど」というように、PSWが専門的にはたらきかけても、うまく機能しないという結果に終わってしまう。

⑥“何とかしたい”

クライエントの気持ちに＜想いを馳せる＞ようになったPSWは、“専門的はたらきかけ”を試みるものの、自分一人の力では何ともならない状況に直面する。そのような場面に直面したPSWは、【クライエントの想いから、あるいは専門職としての視点から、そして、クライエントと一緒に動く中での行き詰まりから、「この状況を変えたい」と心から願い、何とか動いてみる】ようになるのである。

PSWは、「何でこんなに長く入院していなければいけないんだとか、退院できる方法ってないのかなっていうのがあって」と思い考える中で「ご本人が叶えたい希望とか方向性とか課題とかねあった時に、自分に何ができるだろうか、どっから始めたらいいんだろうかって」考えるようになる。そして、その想いに突き動かされ、「ホントに嘆願書みたいな手紙を何回も書いた」「かなりやり取りをして（作業所に）入れてもらったって感じですね」「普段は作業所も、他の人なんかの例だと、こう客観的に見る立場なんですけど、こちらから（グループホームに）入れてもらうという立場なんで。初めて。いや大丈夫です。私たちが責任取りますからみたいな」と行動を起すのである。

しかし、「もうあきれてきて、もう医療機関にこちらとしてはやることやったけど拒否されているようだと言ったら、医療機関で何とかこうアプローチしてくんないかっていう風に投げたんですけど」「分からないですね。何がどうだったかていうのは。きっとなんかもっと細かく見ていくと、何かっていうのは分かるんじゃないかなっていうことはありますけどね」というように、PSWが諦めてしまうと、クライエントとの関係も深まらず、そこで支援は機能しなくなる。

⑦“同じ想いをもつ人とつながる”

PSWが“何とかしたい”と思っても、「やっぱケース展開としてはとっても難しい人でなかなか先

の展開が見えないという点では行き詰まっている」「どうしたらいいのかって、ちょっと分からなくて」「そういうのを、こっちが色々グルグル頭の中で考えたり」となる場合もある。この場面においても諦めず、“何とかしたい”と思い続けることで、【個人での支援に限界を感じたPSWは、同じ想いをもつ人たちとつながり、一緒に支援を行う】ことになる。

例えば、退院したいというクライエントの希望を実現するために動いていたPSWは、「その人が福祉を受けていた役所の人は、とっても熱心になんとか退院して、生活ができるようにさせたいって想いを、すごく持ってくれた」という行政職員に出会った。その行政職員の協力により、「それで全額、あのう●●市の人だから、そこに戻ってくるまでは、ちゃんと自分のところで、あのう責任もってやりますよって言ってくれて。お金も出してくれることになって、その人は生活費も、特に支障が無く、生活できるだけもらえることになって」というように、PSW個人による支援の限界を超え、本人が望む退院への道筋をつけることができた。

「まあ、主治医の先生ももう何十年という付き合いのある先生だったから、こうそれでなんとかやれたっていうかね」というように主治医とつながる。「家族に加わってくださいってこっちから言った訳じゃないんだけど。家族の方からむしろその今後も協力して欲しいって話があって」というように家族とつながる。「そうしたら不動産屋さんのほうでも、まあこれまでの生活の事情とか、その立ち退きになった理由も彼自身、悪い訳じゃないっこととかね。人柄がすごく真面目なこともあってね。やっぱりすぐ不動産屋さんの方も納得してくれて」と地元の不動産屋とつながる。「当時すごい年金のね、博士みたいな人が（市役所に）いたんですよ。その人に、年金のページをコピーしてもらって、それを読んで、勉強したりだとか。いろいろ智恵を借りたりだとかして」というように行政職員とつながる。このように、地域にいる同じ想いをもつ人とつながることにより、退院の方向性が見えてきたり、アパートを借りることができたり、障害年金が受給できたりするのである。

また、「施設の人も一緒に直談判に行ってくれたり」「生保のワーカーも係長も含めて、ガンガン言ってくれたり」というように、同じ想いをもつ人と一緒に動くことにより、「（高齢者施設への入所を）３年がかりくらいで、（市役所の担当部署に）受け付けてもらったんですよ」と行き詰まりを打開していけることもある。

こうした共に戦ってくれる人の存在が、クライエントのみならず、PSWを支え、支援の限界を感じつつも、その場に踏んばり続けることを可能にするのである。

⑧ “腹をくくる”

クライエントの気持ちに＜想いを馳せる＞ことができるようになったPSWは、“共に過ごす”ことなどを通して、【クライエントの利益を守るためには、例え相手から嫌がられたとしても、それも覚悟の上で、相手にその必要性を伝え、動く】と決意するようになる。

強制入院からの退院支援を行っていたPSWは、退院に向けてのクライエントのがんばりを目の当たりにして、「私自身もちょっと腹をくくってこの人とかかわっていかなければならないな」と決心している。

あるPSWは、つきあいの長いクライエントが病状を悪化させた時、“腹をくくり”次のような支援を行っている。「最終的には俺が一番悪い役どころだって思ったんですが。こう力づくで、車乗っけ

てということはありましたけど。まあ、それもつきあい。普段のつきあいと、まあ、そういうこう受け入れるという部分がこちらにある。だから、その分嫌なこともやろうという風に。いざとなったら、もうホントに症状がさせてる苦しい場面みたいなこととは。その時は、もう嫌な思いをしてでも支援する。嫌われても、その場嫌われたとしても。その時は支援する。お金もらってるって。長くやらしてもらってる役割かなあと思ったりはします」。

このような嫌な役回りも、“腹をくくって”行えるのは、「信用されてない関係だったら、全然駄目だけど。でも、なんていうかな？自分をちょっと信頼してくれる。その、この人の言うことだったら聞けるみたいのってあるじゃないですか。具合が悪くなっている最中でも。で、そういう時にそういう人が自分だと思う人は何とか説得したりするよね」と、クライエントとの関係ができていると確信しているからこそ、彼らの辛い場面において、その嫌な役を引き受けるのは自分であると“腹をくくる”ことができるのである。

⑧“察して動く”

“腹をくくる”ことができるようになったPSWは、【胸騒ぎや情報などから直観的に判断して、クライエントの危機を察し、その直感に基づいて動く】ことがある。

嫌な胸騒ぎがしてクライエント宅を訪問したあるPSWは「騒いだ部分があってですね。出てこない人じゃないんだけど。どうもいそうだけど反応がないって言って。天窓が開いてたんで。覗き込んだら、結局そこで、熱中症で意識をなくしていたんですね」という体験をしている。

また、他のPSWも「私が他の人のところをね、訪問に行った時に。誰々さん今日、外来来てなかったよって言われたんですね。だから、あっこれはまずいって思って、即お兄さんに電話して、それでそのアパートに、私も行ったんですね。そしたら内側のドアチェーンってありますよね。それが中からかかっていて、電気がついていて。こう開けて、ドアチェーンの間から見えるじゃないですか。お兄さんが見て、倒れていたんですよ。で、すぐに救急車を呼んで、警察を呼んで、ドアチェーンがしてあるから、消防署も来てくれて、それでドアチェーンを切って、中に入って、衰弱していて、まだ大丈夫だったんですけどね」という体験をしている。

また、危機状況以外においても「言葉が溜まった時の濃度は重要だと思う。溜まっていない時に濃度を濃くかかわっても意味がない」「動物的勘みたいなことになっちゃうんですかね。うん。結構ここに来ている人もそうですね。毎日変わるので。これを言うなら今だなという時があるんですよ。何かこれを聞いてみるのは今だなとか、これを勧めてみるのは今だなとか。それを迷わずつかむっていうところかなと思いますけど」というように、PSWは、クライエントにはたらきかけるタイミングを、感覚的に掴みとっているのである。

このような第六感とでもいうPSWの感覚は、これまでのクライエントとのかかわりを通して彼らに対する深い理解があるためにはたらく感覚と言える。あるPSWは、その感覚を、「何てかな？危険なというかな、こう注意するマーカーみたいなもの」がはたらき、そのマーカーが反応した時に「ここの部分が何かあるんじゃないかって」感じ取ると語っていた。

一方で、PSWが、そのタイミングをつかめないと、「やっぱりその人にかかわり時って、ホントにあると思うので、やっぱその方もすごく長い入院になったけれども、あのう退院したいと思ったりと

か、退院できるときってあったと思うんですね。その時に適切なかかわりをしなかったために長くなってしまったっていうのはあると思います」というように不全感を感じてしまうのである。

⑨“一緒に動く”

クライエントが、PSWを信頼して自力での問題解決が難しくなった時にPSWの支援を受け入れるようになると、PSWは【クライエントの傍らにいて、彼らと共に課題を乗り越えようとする】ようになる。そして、その課題を共に乗り越えることで、彼らとの関係は、より深まっていくのである。

「アパートを一緒に探してというプロセスを踏んで」「一緒にいろいろ老健とか、たくさん見学に行った」「２人でとにかく（入所施設に）相談に行こうって言って相談に行ったんですよね」「病院の入院費払いきれなくなっちゃって、それをどういう風に払うかってね。本人と散々計算したりとか」「銀行とか一緒に行って」というように、PSWは、クライエントと“一緒に動く”ことを積み重ねていく。

このような体験の積み重ねにより「ほとんど一緒にやることで、よりいい関係を築くっていうのかな」「なんか本人とすごく相談して、ちっちゃいことでもいいんだけど、一緒にやってみたことが本人にとって良かったみたいなことかな」というように、PSWとクライエントとの関係は深化していく。

PSWは、クライエントにとって危機的な状況で彼らと“一緒に動く”ことを求められることがある。「今、その襖を蹴破ってしまったと。（家族が）ちょっと恐がっていると、（家族から）あんたとは一緒に暮らせないと言っている」という相談を受けたPSWは「その場で（家族に）電話をかけて、どんな感じなのかってことと、そういうことになっちゃったのかていうことをお話させていただいて」というように、その苦しい場面を、クライエントと共有して、その課題を共に乗り越えようとするのである。このような「修羅場を一緒に色々くぐり抜ける」経験を通して、「一つの困難を共に乗り越えたみたいなっていうところで関係性が強くなるっていうこともある」のである。

また「そういう今の状況をお互いにその共有できるって言うかね。そういう点では関係性っていうのは重要だと思うんですね。例えば、入院しても、それで終わりじゃなくて、また状態が良くなれば今の生活が維持できるんだよっていう説得力もあるし、それを支えますよっていうそういう風な姿勢もとれるって思うんですよ」「こう少し客観的になった時に、こう返しつつ、あの時こうだったね。でも、あの時はこれはちょっと大変だった。これはやり過ぎちゃったよね。だからもう少しこうしようよ。そうしたらお互い楽だよね」というように、危機場面に共に臨んだからこそ、その危機が過ぎ去った後に、互いの想いを語り合えるような関係を築くことができるのである。

(3) ＜想いを共有する＞カテゴリー

日常場面や危機場面を共に過ごす中で、＜体験を共有する＞ことができたPSWは、クライエントを心から信用して、「あなた自身のそういう、先走りをして何とか解決しようとしていること自身が問題をさらに悪くしているんじゃないか」と指摘したり、「怒っていることに対して当然と思えるような部分もあるので、そのことについては率直にすいません」と謝ったりしながら“本音をぶつける”ようになる。時に本音が返って来ないこともあるが、彼らから 「誰にでも話すような内容でないも

の」や「閉じ込められた30年間の思い」という“本音が返ってくる”ようになると、二人の関係は信頼に基づく〔本音の関係〕となる。〔本音の関係〕では、「言い合いを繰り返すことで方向が見えてくる。焦点が絞られてくる」し、「違う方向性が見えてくる」。こうしたやりとりを通じて、お互いの“想いを共有し、納得しあう”のである。そのような関係になると、彼らが退院したり、作業所やデイケアを卒業したりして“援助関係が終結”したとしても、「自分にとってはつながり続けている人っていう風に相手も思ってくれていたみたいで。ずっと手紙をくれたり、挨拶しに来てくれたりとかし続けて。」というように“つながっている感覚”をお互いに持ち続ける。このようにして築かれた＜想いを共有する＞関係は、クライエント - ワーカー関係を超え、「そういう20年来のおつきあいなので。まあ、もうなんていうかな、最期まで可能な限りっていうのは思いとしてあったりはしまして」というように“人と人としてのつきあい”として続いていく。

①“本音をぶつける”

クライエントと＜体験を共有する＞ことを通して、彼らとの間に信頼関係を深めていった【PSWは、クライエントの気持ちや彼らを取り巻く状況などを考えながらも、相手のことを信頼して、本音の想いを率直にぶつける】ようになる。

あるPSWは「その方に私自身、正直に辛いんだと。あんまりしょっちゅうしょっちゅう色んなねことが、その場で言われて。それでそれに対して上手く臨機応変に対応できない」「基本的にあなた自身のそういう、先走りをして何とか解決しようとしていること自身がやっぱり問題をさらに悪くしているんじゃないか」と素直に本音をクライエントにぶつけることができた。

それにより、「そこまで言えるということ自体が非常にあんまりないんですね。大体ご本人のニーズとか、あのう訴えとかに対して、こちら側が伝えていくということしかできていないんですけども。その方に対しては、何かそういう風なところまでの話をできたというところまでは、現時点においてですけども、こちら側も話ができていうところでの、関係形成ができたのかなとは捉えられるという気がします」と肯定的に、そのやりとりを振り返ることができた。

また、クライエントから担当を変更して欲しいと言われたPSWは、「怒っていることに対しても、当然と思えるような部分もあるので、そのことについては率直に、すいませんねって言うことと。あと担当を変えろってことも含めてなんだけど、私の方から、むしろ本当に申し訳なかったということと。今後もね、もしかしたら私はあなたのことを怒らせるようなことがあるかもしれないけど、今後も一緒にね、どうやったらあなた自身がそう幸せになれるかということを一緒に考えていきたいと、ぜひ担当を続けさせてくれと言うことで。何度かな。そういう話、何度かしたかなあ」と素直に自分の気持ちをぶつけたことにより、クライエントと和解し、支援を継続することができた。

PSWが「あの時は、ああ言ったけど、本当はこういう気持ちがあったんだよ。嫌なのは分かるけど、こうこうこうなんじゃないとか言うのは繰り返し話せたりできるね」というように、自分の気持ちを素直にクライエントにぶつけるようになると、例えお互いの想いが異なっていても、「意見の違うことを納得させることはしないようにしよう」「平行線は平行線のままで行こう」と支援者側の意見を相手に対して押しつけなくなるのである。

② “本音が返ってくる”

PSWが素直な想いをクライエントにぶつけ、それに対し【PSWの想いを感じとったクライエントが、本音の想いを伝えてくれる】ようになると、PSWはクライエントとの間に信頼関係ができたと感じるようになる。

「最初の頃は、ずーっと、しかめっ面と、そのしかめっ面が面接の中で笑ったとかね。いう時はちょっと関係が作れたかなと思うし、喋る量が増えたとか、自分からポツポツしか喋らなかったのが、こう自分からワアーっと喋るようになってくるとか。あと結構、自分の内面の部分とか、あんまりこう、誰にでも話すような内容でないものを、こう話題が出てきたりした時は、これは関係が取れているなと、こちらは確認しますよね」「病棟で私の思いを、こう分かってくれって言って、風呂敷包みに包んであった大学ノート、５冊くらいのノートを持ってきて、読ませてくれたんです。その中には、どうして入院になったかっていうことと。お家の庭で火を炊いて、その人が病気だったてことで、周りが騒ぎ出して入院をしたっていうきっかけがあったみたいなんですけど。ご本人の中では、周りが許さないから、自分がそれ以来退院できないっていうことがすごく強くあって。でも、なんていうかな、閉じ込められた30年間の思いていうのが、すごくいっぱい書いてあったんですね。とにかく退院したいんだっていう話があって」というように「誰にでも話すような内容でないもの」や「閉じ込められた30年間の思い」というクライエントの本音を聴いたPSWは「こっちも彼自身の本音みたいなところが少し聴けたってところがあったので、お互いに、そこで理解し合えている部分が少し深まったのかな」と感じるのである。

一方で、「お金がなくなったということも、すぐには言わない。借りてるとか言わない。お金順調です。問題ないですって言って」「直接はその場では合意されたような形になるんですけど、その間少し経ったら来なくなったりとかして」というように、PSWがクライエントと信頼関係を構築できず、彼らが本音を伝えられない状況に陥ると支援自体も途切れてしまうことがある。

② “想いを共有し、納得しあう”

クライエントとPSWが、本音で話せるようになると、【お互いに相手の気持ちに想いを馳せながら、相手を信頼して、共に今後の方向性を見い出していく】ようになる。

PSWとクライエントは、お互いに考え方が異なっていたとしても、対話を通してお互いに納得できる答えを見つけだしていく。あるPSWは、クライエントとの対話の様子を次のように語っている。「今までとは違った働き方で、あなたも納得するものは何かという話を、ジョブコーチをつけた形での仕事だったら。やっぱり腰も痛いし、覚えるのも人より時間がかかって、そこにストレスがかかるから、そういう職場で訓練、一緒にね、訓練とか、補助してくれる人がいたらやりやすいってことになったので、じゃジョブコーチをつけたオープンな働き方を探しましょうってことになりました」。

時にPSWとクライエントは、「最終的に言い合いになるかもしれない」。しかし、「それ（言い合い）を繰り返すことで方向が見えてくる。焦点が絞られてくる」し、「違う方向性が見えてくる」こともある。

また、〔本音の関係〕が築かれていると、相手を思いやり、本当は望まないことであっても、受け入れる場合もある。あるPSWが、長期入院によって作業所のメンバー登録の継続が難しくなったこ

とを、長いつきあいのあるクライエントに伝えた際、次のような体験をしている。「●●（病院）に尋ねて行って、お伝えしたような記憶があります。ご本人も、その時は観念されていて。作業所、また行きたいってことは仰ってはいなかったですけどね」。

一方、「向こうからちょっと話聞いて欲しいんですけどっていうようなことで。その中から明確なこの人のニーズは何だろうとかって思って聞くんだけど、まあなかなか話が核心には行かないし、こう問題を共有するってとこまでなかなか行けなくって。お互いに距離を感じてる部分はあったかもね」というようにクライエントと表面的に話をすることができても、相手の想いを感じ取ることができない場合もある。そのような場合、PSWは「抱えている問題をうまく共有できなかったなあ、もうちょっとうまくできなかった。こう何か、不全感というか、持っているケースですね」と感じてしまう。

④ “援助関係が終結”

援助関係とは、援助という目的があり、その目的達成のための人間関係である。そのため、目的が達成される、あるいは目標が変更されると、【クライエントとPSWとの合意に基づいて決める援助関係の終結】を迎えるのである。

しかし、終結のあり方は必ずしも問題解決で終了する訳ではない。「老健に紹介したというのが（施設）職員としては終結になるんだけれども」「（体調を崩して、作業所には）全く来てませんから、そこでは切ってますよね」というように、クライエントが終結を望まないとしても、PSWの所属する機関の機能から、援助関係の継続が難しくなってしまう場合がある。

「私は今、担当から外れてますけど」「別のワーカーが担当になって」「そこで話をしてても、こじれちゃうだけだなあっと思ったので、違う人に担当変えて」というように担当者変更により援助関係が終結する場合もある。

一方で「本人がまずグループホームの職員に相談して、それでグループホームの職員と一緒にこっちに話を持ってきましたねぇ。その時の話だと、もう目標は達成したんじゃないかと」というように目標が達成することによって、クライエントが「ここが必要なくなったと思える時」が来て、終結を迎える場合もある。

また「ただ実際問題としては接点がドンドンなくなって」「あんたとの契約はもう終わりだから、もしもの時のためにって私に預けておいた鍵があって、それも返してくれとか言い出して」というような形で援助関係、そして支援自体が終結する場合もある。

⑤ “つながっている感覚”

PSWが、クライエントとの間に〔本音の関係〕が築けている場合、PSWとクライエントは【契約関係は終結したとしても、関係がつながっているとお互いに感じる】ことができる。

「楔文字みたいなね字を書く人なんだけど。拝啓、あの何々様みたいにね。始まって、とってもカクカクっていうか四角ばった手紙なんだけど。ホントに暑中見舞いとか、年賀状は１回も欠かさずだったし、くれてたね、くださってた」「どの職員がどう変わったていうのが、本人も関心があって、どうしてたのみたいに、知り合いが部署変わったみたいな。その職員だからというよりは自分の知っ

ている人が、ちょっと状況が変わったらしいっていう感じで電話してきたりていう感じ」というように、援助関係が終結したとしても、様々な形で関係はつながっていく。

あるPSWは、「自分にとってはつながり続けている人っていう風に相手も思ってくれてたみたいで。ずっと手紙をくれたりとか、挨拶しに来てくれたりとかし続けて。最期の少し前は知ってるけど。最期の方は全く別のワーカーがずっとやってたんだけど。そのワーカーも最期に挨拶に来てくれた時も私に会えるよって言ってくれて。話をしたりとかね。ホントになんか、最後に会った時は仏様みたいな感じで。微笑みながらね。声にならないような、もう声って言うかな。体力も段々落ちていてね。もう本当にみんなに会って、帰ってね。まもなくホントに生涯を閉じたていう感じで」と退院していったクライエントとの終末期のつながりについて語っていた。

既に援助関係が終結している場合、PSWとクライエントは、共に時や場を過ごしている訳ではない。しかし、どこかでお互いに相手のことを想い合っている。そのためPSWは「何か知り合いがいるということはなんか心強いことだと思うんで。まあ何かあったときは思い出してくれる人になれば」と相手から見える自分の姿を規定するのである。

クライエントとPSWとの関係は、一度、「当然この人とは人間的な共感を得られた」と感じられる関係が形成されると「そうねぇ。そうだね。あんま切れないね。そう言われてみればね。切れないねぇ。切れちゃう人っているのかな？来なくなっちゃう人はいるけどね。切れちゃう？関係がなくなっちゃう？また病気良くなると来るからね。そういう意味では。あんまり切れないのかな？どうなんだろう」というように不思議と切れずにつながっていく。そして、「今電話して話しても、ああ、とっても平和な気持ちで、どうしてますみたいな話で、お互い気遣って、会話ができるんだろうな」と感じられる関係を続けていくのである。

⑥ “人と人としてのつきあい”

クライエントと時と場と想いを共有してきたPSWは、「職業としてとかではなくて、人と人の関係としてっていう捉え方をどうしてもしちゃいますよね。ワーカーとしてとか、専門職としてとかっていうのが全くないわけじゃないんだけど。そういうのはあるけれども、まず人としてとか、その辺のかかわりで見ていこうっていう風なのがあるのかなあと思うんです」というように、【利用者と支援者という関係を超え、人と人としてつきあい続ける】ようになる。

あるPSWは、援助関係としては終結しているクライエントとの関係を「そういう20年来のおつきあいなので。まあ、もうなんていうかな…最期まで可能な限りっていうのは思いとしてあったりはしまして」「お互いに。亡くなる時は云々みたいな話はさすがにしてませんけど。そういう思いはあるのかなっていう気はしますけどね」と相手の想いを察しながら、相手に対する自らの想いを語っていた。

こうした関係は、「援助する者－される者」から成る援助関係を超えた関係である。クライエントが抱える困難は、彼らが体験している生活世界の中で生じている。彼らが体験してきた困難さを、PSWが同じように体験することはできない。しかし、困難を抱えながらも生きていく彼らの支えとなるためには、彼らが生きている場に共にいて、“人と人としてのつきあい”続けることが必要である。こうした専門性を超えた“人と人としてのつきあい”こそが、逆説的ではあるが、生活者の視点をもつPSWの専門性ということができる。

Ⅳ　結果のオリジナリティー

精神科ソーシャルワークにおける「かかわり」に関する先行研究との比較を通して、本研究の結果を位置づけ、結果のオリジナリティーを明確にしていく。

1．感情を行為で示すことにより展開されていくプロセス

これまで柏木や谷中らによって実践知として語られてきたPSWの「かかわり」に関する指摘や大谷の研究による「関係性」の構成要素は、その意味することの重要性は理解できても、それがどのように形成されるかという経験のプロセスについては、必ずしも明らかにされてはいなかった。本研究では、そのプロセスを示すことができたと考える。

PSWの「かかわり」形成プロセスにおいては、“本人視点から理解”“好意的感情”“つながっている感覚”“人と人としてのつきあい”といった主に感情面に関する構成要素を、PSWが意識化するだけではなく、“人となりを知る”“安心できる距離感・ペースの保証”“想いの確認”“専門的はたらきかけ”“共に過ごす”“待つ”“一緒に動く”“察して動く”“本音をぶつける”というような行為を通してクライエントに表し、「かかわり」の質を深めていた。例えば、“待つ”という行為は、クライエントに対して“好意的感情”を抱くようになったPSWが彼らに対する信頼を示す行為として現れていた。

このようにPSWの「かかわり」形成のプロセスでは、PSWは、自らの情緒を、行為を媒介にしてクライエントに伝える。その行為に対するクライエントの反応が、PSWの情緒を揺さぶる。そして、PSWが再び行為を媒介にして自らの情緒をクライエントに伝えることにより＜想いを共有する＞関係に深まっていく。PSWの「かかわり」は、このような循環的因果関係により形成されることが明らかになった。この結果からも、PSWが実践場面において自らの「かかわり」形成のプロセスを点検するには、感情面での自己覚知だけでなく、行為への省察も不可欠であると理解することが必要である。

2．“人と人としてのつきあい”に至るプロセス

本研究では、PSWの「かかわり」形成のプロセスで辿りつく一つの到達点が、クライエントとの“人と人としてのつきあい”であるということが明らかになった。

先行研究においても、PSWの「かかわり」は、「問題解決で終了するものではなく」（谷中1983：31)、援助関係の終結と共に「スパッと切るということができない」関係性であり（柏木2010:69)、「公私一体」の関係性でもあること（向谷地2002、2009）が指摘されてきた。本研究では、先行研究で断片的に語られてきた“人と人としてのつきあい”へと展開していく「かかわり」のプロセスを実証的に示したと考える。

稲沢は、援助する役割であるソーシャルワーカーが援助することができないという「援助の限界点」において「新たな関係」が出現すると指摘している。「援助の限界点」において逃げられる者であるワーカーがあえて逃げ出さないことにより「逃げられない者」と「逃げない者」へという無力さを共有する関係に転換する。その関係においては、援助の限界性が露呈されているため、援助関係とは呼ぶことはできないかもしれない。しかし、その「新たな関係」が「人は人のかたわらにいて、あ

るいは、かたわらにいるだけだからこそ、人を支えることができることもある」と説明している（稲沢2002：194）。

尾崎は、絶対的解答のないテーマ・矛盾に満ちた人生の前では、「いかなる人も悩み、無力さを痛感する。この点で、援助者とクライエントは対等である。」とした上で、同じ悩みや無力さ、矛盾や葛藤を抱えた者同士が向き合うことで「援助というかかわりはここからはじまる。」と指摘した。そのためにも「援助者が相手と自分の葛藤から逃げださないこと、否認しないこと」が必要であり、「これが援助の出発点であり、現場の力の基礎である。」と指摘した（尾崎2002：19）。

稲沢や尾崎が指摘しているように、支援の現場では、援助をしたくても、自らの「限界」や「無力さ」に直面し、援助することができないということがある。「余命そんなにないっていう時にね。本人が希望しているから連れて来てくれて。もうリクライニングの車椅子で寝ているような状態だけど、すごいいい顔をしていて。あたしなんかにも挨拶をしてくれて。それから１ヶ月か２ヶ月後位に亡くなったんです。」「そういう20年来のおつきあいなので。まあ、もうなんていうかな、最期まで可能な限りっていうのは思いとしてあったりはしまして」「お互いに亡くなる時は云々みたいな話はさすがにしていませんけど。そういう思いはあるのかなっていう気はしますけどね。」と、PSWたちは、相手の想いを察しながら、クライエントの終末期におけるその「かかわり」を語っていた。

このようにPSWの「かかわり」は、“援助関係が終結”した後も、時には、どちらかの生の終末まで“人と人としてのつきあい”として続いていく。そして、そのような「かかわり」においては、何らかの行為を示すことができなくても、あるいは何らかの具体的な行為を示さなくとも、お互いに“つながっている感覚”を持ち続け、“人と人としてのつきあい”を続けることが可能になる。このような「援助関係」から「かかわり」へと展開していく二者関係は、もはや職業的関係とは言えないかもしれない。しかし、PSWは、その「かかわり」が、人を支えることもあるということを理解する必要がある。

Ⅴ　調査の限界と課題

１．本研究の限界

本研究では、分析ワークシートを用い、継続的比較分析を行い、小さな理論的飽和化を行った。また、分析結果全体に対しても方法論的限定としてデータの範囲の限定と分析結果のまとまりを、論理的密度をもって成立し得るデータの範囲に調整を行った。

このようにして、本研究においては一定の収束感を得ている。しかし、その過程の中で、理論的飽和化に至らなかった部分もあり、さらなるデータ収集や分析の必要性を残しているため、その判断は、修正可能性を残した結果と言えよう。

２．今後の課題

現在の精神保健福祉現場では、診療報酬や障害者総合支援法などの影響により、PSWの業務が細分化されている。また、入院期間の短期化や就労移行支援のような障害福祉サービスの利用期限の設定は、十分な時間をかけて「かかわり」、時が満ちる「時熟」（柏木1997：10）を待つことを難しくし

ている。

本研究では、調査協力者を大学で社会福祉学を修め、精神保健福祉領域で勤務する経験13年以上のPSWとしたが、現在のPSWは、調査協力者がPSWとして成長してきた時代と比べ、「かかわり」に十分な時間をかけられない状況が存在している。

また、本研究では、統合失調症を有するクライエントに対するベテランPSWの「かかわり」に限定して調査を実施した。そのため、依存症、人格障害、発達障害等異なる精神障害を有するクライエントに対しては、異なる「かかわり」のあり方が求められることも考えられる。

M-GTAでは、「応用者」という役割を規定し、生成された理論を、実践現場で活用しながら修正していくことを、そのプロセスに組み込んでいる（木下2007：86-7)。PSWの「かかわり」を実践理論として構築させていくためには、分析焦点者をより限定して設定し、「応用者」によって実践現場で活用・修正されることにより、引き続き論理的密度を向上させていく必要性がある。

Ⅵ　おわりに

現場のPSWたちは、「ワーカーが専門職としての限界を超えたところで踏みとどまり、クライエントに連帯する者として相対するとき、関わりの範囲は極めて限定が難しくなる。」（大谷2012：95）という状況で葛藤していると考えられる。

しかし、「精神障害者は、その安心できる世界を根底から揺さぶる体験をしたからこそ、安心できる世界の意味や深さが存在しているとしている。自明にある安心できる世界の意味や深さを共に生きようとする姿勢や共に居るという姿勢、何かに向かって共同作業する姿勢や態度が実存的な出合いを成り立たせており、それが臨在の証人[1]といわれる所以である」（坂本2007：172）という説明からも、精神障害者にとり、自分とは異なる他者が、かたわらにいて「かかわり」続けることの意味を読み取ることができる。

また、わが国における精神障害者の社会的入院は、地域社会に偏見や差別を生み出し、家族や友人から本人たちを引き離した。家族や友人に看取られることなく、亡くなった後の遺骨の引き取りさえ家族から拒否されることもある精神障害者にとり、「いつでも困った時には一身に我が身に責任をひきうけるといった覚悟」（谷中1993：236）をもったPSWが、例え援助ができなくても、ただかたわらにいて無力さを共有することに、PSWとしての存在意義の一端を見出すことができる。

PSWがクライエントと連帯するという覚悟をもつ時、専門職としての限界は、すぐにPSWの現前に現れる。そのため、PSWは、その限界点において自らの「かかわり」のあり方を問い直し、葛藤せざるを得なくなる。PSWが、援助の限界を越えてクライエントと“つながっている感覚”を持ち続け、“人と人としてのつきあい”を続けていく決心をする時、そこに援助関係とは異なる「かかわり」が現れてくる。

PSWが、制度や機関が求める役割をこなすだけではなく、自らが果たすべき役割やその存在意義について問い続けるためにも、自らの「かかわり」を省察することが必要であり、その省察を促すためにも、「かかわり」を実践理論として構築させていく必要があると考える。

（文献）

藤井達也（2004）『精神障害者生活支援研究』学文社.

稲沢公一（2002）「援助者は友人たりうるのか－援助関係の非対称性－」古川孝順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子著『援助すること』有斐閣、135-208.

岩田泰夫（1999）「専門職になるための過程と教育実践」『精神科看護』26（８）、70-3.

Flick（1995）“Qualitative Forschung”、Rowohlt Taschenbunch Verlag GmbH.（＝2002.小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『質的研究入門－〈人間科学〉のための方法論』春秋社）

早川進・谷中輝雄（1984）『流れゆく苦悩』やどかり出版.

門屋充郎（2010）「今も !! われわれ精神保健福祉士に求められるもの」『精神保健福祉』41（３）155-159.

柏木昭（1975）「協会10年の歩みの中から」『精神医学ソーシャルワーク』９（１）、3-18.

柏木昭（1995）「法38条の戦略」『精神医学ソーシャルワーク』35.

柏木昭（1997）「直接援助技術の臨床研究に携わって」柏木昭・籏野脩一編『医療と福祉のインテグレーション』へるす出版、2-12.

柏木昭（2002）「ソーシャルワーカーに求められるかかわりの意義」『現代のエスプリ』422、36-45.

柏木昭（2007）「誌上スーパービジョンとは何か」社団法人日本精神保健福祉士協会広報出版部出版企画委員会編『スーパービジョン』へるす出版、1-4.

柏木昭・佐々木敏明（2010）『ソーシャルワーク協働の思想』へるす出版.

柏木昭・大野和男・柏木一恵（2014）「鼎談／精神保健福祉士の50年～何が出来、何が出来なかったのか～」『精神保健福祉』45（３）、158-163.

木下康仁（2003）『グランデット・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.

木下康仁（2007）『ライブ講義M-GTA』弘文堂.

向谷地生良（2002）「公私混同大歓迎－公私一体のすすめ－」浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論』医学書院.

向谷地生良（2009）『統合失調症を持つ人への援助論』金剛出版.

OECD（2014）Mental Health Count（http://www.oecd.org/els/health-systems/ MMHC –Country-Press-Note-Japan-in-Japanese.pdf、2014.10.5）.

大谷京子（2012）『ソーシャルワーク関係』相川書房.

尾崎新（2002）「葛藤・矛盾からの出発」尾崎新編『「現場」のちから―社会福祉実践における現場とは何か』誠信書房、1-23.

坂本智代枝（2007）「精神障害者の地域生活支援の思想に関する研究Ⅰ－やどかりの里の生活支援の理念形成の下支えをした思想－」『大正大学研究紀要』（90）、176-191.

社団法人日本精神保健福祉士協会企画部生涯研修制度検討委員会編（2007）『社団法人日本精神保健福祉士協会構成員ハンドブック』社団法人日本精神保健福祉士協会.

高木健志（2013）「精神保健福祉士による退院援助実践に関する考察（その１）」『山口県立大学社会福祉学部紀要』19、37-47.

坪上宏（1988）「援助者自身の自己発見」谷中輝雄・藤井達也編『心のネットワークづくり』松籟社、189-196.

谷中輝雄（1979）「看護を超えて」『看護学雑誌』43（８）.

谷中輝雄（1983）「精神障害者とのかかわりから学んだこと」『ソーシャルワーク研究』８（３）.

谷中輝雄（1993）『谷中輝雄論考集Ⅱ　かかわり』やどかり出版.

横山登志子（2008）『ソーシャルワーク感覚』弘文堂.

注

1　早川は、「臨在の証人」を次のように説明している。人は一人一人の世界に住んでおり、共通世界といえども一人一人の主観性の関心事の域を出ない。つまり、人は体験した本人とは異なり自分の範囲内でしか捉えられないという限界がある。本人が捉えた世界は、本人が臨んでいた世界（臨在）であるために否定はできないが、そこに居あわしている他者は、その「臨在の証人」となることができる。よって、PSWはクライエントの「臨在の証人」となりうるし、その逆にクライエントもPSWの「臨在の証人」となりうる（早川1984：154-5）。

The Process for Establishing “kakawari” Between Expert Psychiatric Social Workers and Clients

KUNISHIGE Tomohiro

The aim of this research has been to demonstrate the process for establishing “kakawari” between expert psychiatric Social Workers and Clients.

I interviewed 10 experienced psychiatric social workers and analyzed their responses via a Modified Grounded Theory Approach. Results elucidated the process of “kakawari” formed through 3 categories, “thinking about emotions of clients”, “sharing experiences with clients”, “sharing emotions with clients”.

Firstly, Expert Psychiatric social workers show their emotion to clients by the action. Secondly, the reaction to worker’s action influence worker’s emotion. Thirdly, expert psychiatric social workers show their emotion to clients by the action,again. As a result, the relationship between Expert Psychiatric Social Workers and Clients change into the relationship to be able to share emotions each other. So the process for establishing “kakawari” is formed in the circular causality.

Key words: “Kakawari”, Relationship between Social Workers and Clients, Circular causality

原稿受領2014年11月14日
査読掲載決定2015年１月26日